



外宮（豊受大神宮）



内宮（皇大神宮）

伊勢神宮の内宮（皇大神宮）と外宮（豊受大神宮）の殿舎を描いた軸装の絵図です。本紙の寸法は縦三四・〇cm・横一一四・〇cmで、右側に内宮、左側に外宮を配しています。

両図とも、瑞垣を巡らせた正殿と宝殿を中心に、玉垣や荒垣で幾重にも囲まれた大宮院をはじめとした殿舎が描かれています。注目されるのは、第四門の内側に描かれた齋王候殿と舞姫候殿です。

これらは、平安時代の初めに伊勢神宮から朝廷に提出された神宮の由来や殿舎、職掌、行事などの報告書『皇大神宮儀式帳』と『止由気宮儀式帳』にみえる齋内親王侍殿（外宮は齋内親王殿）と女孀侍殿にあたるものです。齋王が神宮の三節祭にあたり参宮して祭に奉仕する際に、齋王および齋王に仕えた女官（女孀）が使用しました。舞姫候殿の名は、齋王による奉仕が終わった後に女孀が五節舞を舞ったことに由来する別称です。

齋王制度は南北朝時代に廃絶し、齋王の参宮も途絶えます。本絵図は、外宮の祠官で国学者でもあった出口延経（一六五七～一七一四）が両儀式帳の記述を考証して齋王候殿と舞姫候殿があった平安時代の両宮の殿舎を描いた絵図と図様がほぼ一致（殿舎名の記載はない）することから、その絵図を写して製作されたと考えられるものです。

三重県誕生一五〇周年記念春季企画展 資料紹介

いせりょうしゃぐわが
伊勢両社宮画

（江戸時代 館蔵）

斎王のつとめ

— 斎王の参宮と離宮院 —

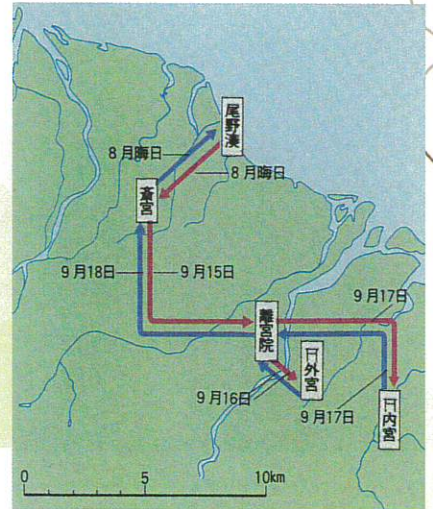
斎王は、天皇に代わって伊勢神宮に仕えるため、天皇が即位するたびに未婚の皇女の中から占いで選ばれて伊勢斎宮へと遣わされました。

斎王の最も重要なつとめは、年に三回、伊勢神宮の三節祭の際に参宮して祭祀に奉仕することでした。三節祭とは、六月と一二月の月次祭、九月の神嘗祭のことで、伊勢神宮で行われる年間の祭祀の中でも最重要視されたものです。斎王は三節祭の参宮以外は、斎宮の宮殿にあつて伊勢神宮への遥拝をはじめ、さまざまな年中行事にあたりながら潔斎生活を送っていました。

この展覧会では、『伊勢物語』や『源氏物語』などの王朝文学に登場するなど、都の華やかな王朝文化との関わりの中で注目されることが多い斎王について、その本来のつとめである伊勢神宮への奉仕の有り様にスポットをあてて紹介します。

一 斎宮の年中行事と斎王

斎宮では、年間を通してさまざまな年中行事や祭祀、儀式が行われていました。天皇に代わって伊勢神宮に仕える斎王をトップとする斎宮は、斎宮寮以下の官司の官人や斎王の身のまわりのお世話をした女官などによって構成され、朝廷のミニチュア的な組織であるといわれます。斎宮で行われる年中行事などもそのことを反映して、その多くが朝廷で行われるものと対応関係にあります。このことは、伊勢



神嘗祭での斎王の行程図

の斎宮だけでなく、斎王が卜定されて伊勢に群行するまでの準備期間として潔斎生活を行った初斎院、野宮においても共通していたのです。

例えば、大殿祭（建物を祓い清め安全を祈る祭）や毎月朔日に行われた忌火・庭火祭（神饌や斎王の御飯を炊ぐための竈の火の神を祀る祭）などの祭祀、二月の祈年祭（稲作の予祝祭）や一二月の新嘗祭（収穫感謝祭）などの祭祀、正月の元日節会・七月七日・九月九日の節会などの行事がそれにあたります。このほか、正月朔日の斎宮寮以下の官司の官人による斎王拝賀、正月三日の伊勢神宮の官司、禰宜らによる斎王拝賀、神宮の三節祭の参宮、先にみた新嘗祭での神事への斎王の奉仕などは、斎王が直接に携わる行事・祭祀として重要なものでした。

二 斎王の伊勢参宮

それでは、神宮の三節祭の伊勢参宮とはどのようなものだったのでしょうか。平安時代中ごろに成立した法令集『延喜斋官式』や前頁で触れた『皇大神宮儀式帳』・『止由気官儀式帳』などの記述をもと

にみていきたいと思えます。

三節祭は、六月と一二月の月次祭、九月の神嘗祭のいずれも日程は同じで、一五・一六日に外宮、一六・一七日に内宮で実施されました。

斎王はそれぞれの祭が実施される前月の晦日、月次祭では近くの多気川（現在の祓川）で、神嘗祭では尾野湊（大淀浦）で禊を行いました。そして翌月の一五日に斎宮を出立して官川の手前にあった離宮院に入ります。その後は離宮院を基点にして、一六日に外宮、一七日に内宮へ赴き祭祀に奉仕して一八日に斎宮に帰りました。一五〜一七日の三日間いずれも離宮院に宿泊する三泊四日の行程でした。月次祭と神嘗祭における外宮および内宮での斎王



斎内親王参宮図（複製）
御巫清直考証、中村左洲画
斎宮歴史博物館蔵（原資料：神宮徴古館蔵）



国史跡離宮院跡 (伊勢市小俣町)

の祭祀への奉仕の次第はほぼ同様です。離宮院を出発して外宮ないしは内宮に到着した齋王は、輿(こし)華輦(かかれん)から軽量な手輿に乗り換えて、大宮院の中にあった齋内親王侍殿(外宮は齋内親王殿)に入りしました。女孀侍殿には齋王に仕えた女官(女孀)が入りました。ここで齋王は、女官長の命婦(内侍)を介して大官司から渡された木綿鬘を身に着け、受け取った太玉串を手に携えて瑞垣御門(正宮を囲む瑞垣に付く門)の前に進みます。太玉串は、櫛に麻の織維をつけたもので、これに神が宿るものと考えられています。

ここで齋王は、再拜兩段(二度の拝礼を二回繰り返す拝礼の作法)を行った後、命婦を介して太玉串を物忌(神宮の巫女)に預けます。物忌は受け取った太玉串を瑞垣御門の西側に立てました。

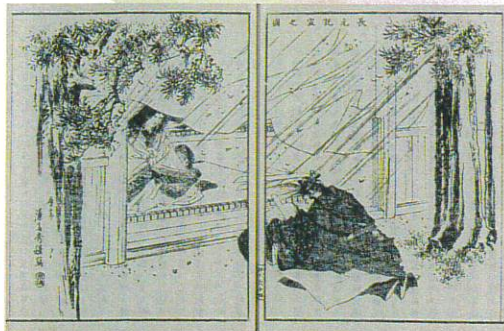
神の宿る太玉串を物忌を介して正宮の門前に立てること、これが齋王の最大のつとめでありました。三節祭の祭祀の中で齋王が行う重要な役割はこの太玉串の儀のみでしたが、その中にこそ天照大神の御

杖代である齋王のイメージが集約されていると考えることが出来ます。

二 離宮院と齋王

離宮院は、齋宮と神宮の間にあって、齋王の伊勢参宮のための離宮としてだけでなく、神宮の事務を掌る大官司の政庁が置かれ、度会郡の駅家も併置され、朝廷から派遣された奉幣使(例幣使)や公卿勅使の参宮にあたり利用されるなど、複合的な役割を兼ね備えたところでした。天長元年(八二四)から承和六年(八三九)までの一五年間、齋宮自体が離宮院に移されていた時期もあります。

離宮院跡では、これまでに一部で発掘調査が行われており、八脚門や掘立柱建物の遺構などが見つかっています。史跡公園内には、敷地を区画したと見られる土塁が遺存しており、発掘調査の成果から、離宮院にも齋宮と同じような方格街区が形成されていた可能性も指摘されていますが、その全容は明らかではありません。



神都名勝誌 卷四
長元の齋王託宣事件の様子を描いた挿絵
齋宮歴史博物館蔵

四 齋王の参宮をめぐる出来事

齋王は天皇に代わって伊勢神宮の祭祀を滞りなくつとめることを役割とする存在であり、政治的な動向や事件とはあまり縁のない存在でした。しかし、内宮の禰宜荒木田氏によって書き継がれた神宮関連の記録『太神宮諸雜事記』などには、齋宮や齋王に関する事件の記事もみられます。

その多くは、齋宮寮の官人と伊勢神宮の神官の間の喧嘩、齋王の参宮に参列していた齋宮寮の官人や女官の近親者の不幸や牛馬の死などによって発生した穢れにより祭祀の進行に支障をきたしたことを伝えるものです。その中でも、齋王が深く関わったものとしてよく知られているのが、長元四年(一一〇三)に発生した齋王託宣事件です。六月の月次祭の際に、齋王嬖子女王が神がかり、荒祭宮に祀られた天照大神の荒御魂が憑依して、齋宮寮頭夫妻による乱行を糾弾した事件です。

この展覧会では、伊勢神宮の祭祀への奉仕をはじめ、齋王のつとめについて、さまざまな側面から紹介します。展示を通して、王朝文化の華やかな側面だけではない視点から、齋王への関心を深めていただければ幸いです。

学芸普及課 天野秀昭

三重県誕生一五〇周年記念春季企画展 齋王のつとめ

齋王の参宮と離宮院

会期 四月一八日(土)～六月一四日(日)
会場 齋宮歴史博物館 特別展示室
観覧料 一般 四〇〇円(三二〇円)
大学生 三二〇円(二五〇円)

高校生以下無料 ※()は団体料金
常設展示との共通券：一般七〇〇円
大学生五一〇円